

IMAJ

NEWS NO.98

第55回コーMRA世界大会レポート

October 2001

『グローバル化する世界と私たちの責任』



—心を大きく広げる—

今夏のMRAコー世界大会は、7月5日から8月19日までの6週間にわたって開かれ、75ヶ国からの2000名が、次の6つの会議に参加しました。

7月 5日 (木) ~ 13日 (金)	自由、責任、リーダーシップ
7月 14日 (土) ~ 19日 (木)	コー産業人会議
7月 22日 (日) ~ 29日 (日)	21世紀のための目的と価値観を探る
7月 31日 (火) ~ 8月 5日 (日)	和解への課題1—平和作りのイニシアティブ
8月 7日 (火) ~ 11日 (土)	恐れから愛へ—信仰の旅
8月 14日 (火) ~ 19日 (日)	和解への課題2—グローバル化する世界と私たちの責任

最後の会議となった『和解への課題2—グローバル化する世界と私たちの責任』の一環として、本年度で第5回目となる『政治円卓会議』も開催され、日本からは、羽田孜衆議院議員、谷川和穂衆議院議員、橋本徹国際MRA日本協会会長を初めとした代表が参加した他、相馬雪香名誉会長、榊たか子副会長を含む総勢22名が後半の3つの会議を中心に参加しました。又、その中には、世界各国からの21名の大学院生等を対象に、紛争解決の理論と技術を学ぶ『コー・スカラーズ・プログラム』への目黒裕佳子さんの参加もありました。

コーのマウンテンハウスでは、世界各国の様々な状況に置かれた人々が集い、全体会議や分科会といった会議への参加はもとより、色々なグループがそれぞれの国や地域で抱える問題の解決に向けた重要な話し合いを同時進行的に行っています。又、料理作りや皿洗いや食事のテーブルでの



サービス、そして、ベッドメイキングなどのハウス・キーピング等を参加者が分担し、相互に奉仕し合うというコーの独特のやり方が、一つの世界家族という融和の雰囲気醸し出し、その中で対立し合う状況から参加した人々も話し合いの場につこうとするようになるのです。

■主な内容■

◆第55回コー世界大会レポート・1-8

◆MRAニュース短信・12

◆第24回関西MRA秋季大会報告・9

◆事務局便り・12

◆第16回CRTグローバルダイアローグレポート・10-11

『和解への課題 1 —平和作りのイニシアティブ』の会議には、様々な紛争を抱えた国々を含む67ヶ国から400人以上が参加しました。その中の幾つかのハイライトをご紹介します。

- ・長年に亘り内戦を続けた、ボスニア・ヘルツェゴビナの、ムスリム人、クロアチア人、そして、セルビア人の各グループに属する参加者20名が参加し、今後のグループ間の和解をもたらすための方策を探るべく率直な対話を行いました。
- ・何回かのプライベートな話し合いの後、イスラエル人女性とパレスチナ人が同じ壇上で、公正な解決をもたらすために、今後、共に働いていくと決意を語りました。イスラエル人女性はアラブ人の参加者たちに壇上から真摯に謝罪をしました。
- ・パプア・ニューギニアの年輩の参加者からは、「小学生の時、自分の学校の3名の先生が目の前で日本軍に斬殺されてから日本人を憎むようになりましたが、1963年に日本に招かれてMRA会議に参加し、そこで、許しの精神を学びました。自分の子供達に、憎しみの心が伝わらないようにと気を付けてきた結果、現在、建築家の息子は、日本人のスタッフを採用して共にプロジェクトに取り組んでいます。」と話してくれました。
- ・ソマリア、エチオピア、エリトリアを初め、内戦等の多くの問題を抱えたアフリカ諸国から多数の参加者がありました。スーダンでも、45年にわたり、人口の7~8割を占める北部のイスラム教徒と南部の主にクリスチャンの人々の間で内戦（犠牲者は100万人、難民は国内外で200万人以上）が続いています。そのスーダンの南北双方の母親たちで構成する“平和を創造する母親達”という団体の代表たちが、その活動の様子を報告しました。又、やはり内戦の続く、シエラレオネからも異なった政治的立場のグループの15名が参加しましたが、内戦で夫も両親も無くしたという女性が、グループの他のメンバー達と共に壇上に並び、『自分たちは和解をもたらす大使になりたい』と語りました。
- ・本年も4名から成る中国の国際交流協会からの代表団（代表 郁文副会長）が参加し、世界中からの参加者と交流を図りました。郁文代表のスピーチの一部をご紹介します。

「私はかつて抗日運動に参加したゲリラ軍のベテラン兵士でした。家族や友人たちの中にも、その戦いで命を落とした人達があります。しかし今、私には、日本人の友人が沢山います。今日ここにご出席の国際MRA日本協会の相馬さん、榊さんは私の古い友人です。この会議でも若い人を含め、更に新しい日本の友人が出来ました。私達は中日友好のために共に働いていきます。・・・コーは和解の場です。戦後、独仏間の和解の実現のためにも大きな役割を果たしました。また、世界各地で起こっている人種的、宗教的紛争等に対しても、常に大きな役割を果たして来ました。コーが、今後共、戦争を回避し平和を守るために、共に努力する人々の力を結集させる場所になるよう望んでいます。」

- ・3人の酋長達を初め8名のカナダ・インディアン（アルベルタ州のナコダ族）の代表が参加しました。白人への憎しみを謝罪した、マキノ（1960年代にアメリカ・ミシガン州にあったMRA国際会議場）での体験を紹介した長老（偉大な酋長の一人でありMRAの精神を世界に伝えて歩いたチーフ・ウオーキング・バッファローの子息）のスピーチを以下にご紹介します。

『1880年代、先住民の子供のための寄宿制学校がカナダ中に作られました。私は寄宿制学校の補欠生でした。私は6才で、英語も解らないままこの学校に送られました。私には先生の質問が理解出来ず、そのため鞭で打たれました。私ばかりでなく、ほかの生徒達も同様でした。教室で自分達の言葉で話していると、やはり鞭で打たれました。

大人になって、我々種族の歴史と、我々がどれほど不正と苦悩を味わされ、又、どれほど酷く扱われ、痛めつけられたかを学びました。後に、ミシガン州のマキノ島にあったMRAのセンターに行くまで、私は白人に強い敵意と憎しみを持つ人間となりました。マキノ島に着いて、私はアルベルタ州から来た青年と同室になりました。忽ち私は彼に敵意を抱きました。その日以降、世界各国から人種や肌の色の異なる多くの人達が来ているのを目にし、彼等が、自分の人生でどこが間違っていたのかを反省し、それを正し、これからこのように生きていきますという決意を述べる様子を耳にしました。そこで数日が過ぎた後、「許し」という言葉を聞いて、私は、自分自身のことを考え始めました。ピーター・ハワード氏（MRAの当時の指導者）がスピーチをした時、父親と共に最前列に坐っていましたが、あたかも今

までの私の全人生について話しているかのようで、自分がとても罪深い人間だと感じました。同時に、「神には何も隠せない」という考えが浮かび、ルーム・メートのジャックのことを思いました。ルーム・メートとしての彼を憎んでいたことについて、部屋に帰ったらすぐ謝らねばと思ったのです。

そこで、彼が部屋に戻って来た時、「ジャック、君を憎んでいたことを詫びたい。許してほしい。」と言ったところ、彼は、「MRAに出会うまで、自分はインディアンの人たちに何の関心も持っていなかった、自分も謝りたい。」と言ってくれたのです。

我々はお互いに正直になれました。私は生まれて初めて、自分がどんな種類の人間だったかが解り、その日から、私の苦悩と憎しみは無くなりました。誰とでも話せるようになりました。皆が、私の友人となったのです。

その時以来、私は自国を変えていく必要があると感じ始めたのです。様々な溝を埋めていくためには、絶対道徳規準、すなわち、正直、純潔、無私、愛に拠って生き、人間性を変えなければならないと感じました。そのことにより初めて、カナダという国においてお互いを理解し、信頼し尊敬できるようになるでしょう。

これからの若い世代の時代がどうなっていくのか、私には解りませんが、カナダの白人と我々インディアンという2つの民族の関係を改めて行く必要があると思っています。お互いの間には今も多くの偏見や差別が存在します。しかし、これらを変えることで、我々はこれからの世代のために、より良きカナダを作り上げる事ができるのです。

ここで、私が憎んで来たすべての人々にお詫びすると共に、許しを乞いたいと思います。

これが、我々のリーダーである素晴らしいチーフ達を居留地から連れてきた理由です。もし彼等がMRAの精神を知れば、きっと良いリーダーになり得るでしょう。彼等もまた、我々の国の問題に解答を見出すでしょう。民族間においても、我々インディアン同士の間にも、和解が必要なのです。』

(エルダー、ビル・マクレーン)

続いて開かれた『恐れから愛へ—信仰の旅』の会議にも様々な宗教、信仰を持った人々が各国から集いました。『恐れの家から愛の家』に移ろうという呼びかけが一貫して会議の底流となっていました。

・この会議の中から、レバノンの現ベイрут市長を務めるチエハブ氏の話をご紹介します。

『レバノンの内戦(1975-1990年)で、レバノン人民兵グループの一人として武器を手にした自分は、やはり間違った事をしたのだと確信しました。レバノンの内戦中、私が他の人達と共に犯した非道な行為は、結局のところ、自分を苦しめ、良心を引き裂いたのです。私は、悪夢にうなされ、若い一時を捧げた多くの命と、自分の人生を無駄にしてしまった悔恨に苛まれる人間になっていました。

戦争を通じての私の個人的経験は、回教徒、キリスト教徒、そしてその他の教義信条を持つ人達のすべてが、「人類家族」の兄弟姉妹であるという事を教えてくれています。今や我々は暴力と過激主義に向かって共に立ち上がるべきだと思っています。子供達がよりよい世界を十分に享受出来るよう、我々の考え方の違いを克服するという観点での対話を進めるために、出来る限りの努力をすべきだと思っています。

最後に、私は今まで私がやってきた事について、また、レバノン内戦で私が誤りを犯したすべての人達に対してもお詫びを言いたいのです。私はすべての人々、特に我が国の人々に対して、互いに愛をもって接しようとして求めたいのです。特に、敵対して来た人達への愛を求めたいのです。私は全ての宗教は愛を求めていると信じています。

私は、全力をもって、「恐怖」ではなく、「愛」の道を進んで行くことを、今日、皆さんの前で誓います。そうする事によって、自国で何年もやって来てしまった、無知による行為や偏見、そして非道な行為が許されることを望んでいます。』こう語った後、彼は、次のような一つのエピソードを語ってくれました。

『ある日、兵隊を引き連れていた時、目に付いたパン屋に兵隊を送り、少額のお金で多くの兵隊用のパンを要求しました。それが断られた時、更に屈強な兵士を送って脅し取ってしまったのです。

内戦終結後、その自分の罪に気づき、そのパン屋を訪ねました。恐怖に怯えるそのパン屋の主人に家族を呼んでもらい、彼等の前で心から謝罪しお金を返しました。

その後、自分が市長選に推されるようになった際、驚いたことに、そのパン屋の一家が熱心に選挙の手伝いをしてくれるようになったのです。』

8月14日から19日までは、59ヶ国から500人近くが参加して『和解への課題2 — グローバル化する世界と私たちの責任—』のテーマで最後の会議が開催されました。この会議では、市民社会、国家、市場、そして、地球村における良きガバナンス(統治)の意味を探りました。この会議での幾つかのハイライトをご紹介します。

この会議の一環として開催された第5回『コー政治円卓会議』には、前述のように日本の羽田孜、谷川和穂両衆議院議員、藤田幸久前衆議院議員、及び、橋本徹国際MRA日本協会会長(富士銀行会長)が参加されましたが、韓国からも、与野党の国会議員各1名と元駐日大使といった方々が夫人同伴で参加されました。朝鮮半島問題についてのワーク・ショップが開かれ、韓国の方々が南北の和解について話しました。その際にも、教科書問題や、靖国神社参拝問題等には一切触れることはありませんでした。最後に、谷川議員が立ち上がり、『あなた方は日本の教科書問題にも靖国神社問題にも触れられなかった。然し、これは我々の問題で、我々自身が、今、変わらなければいけない。』という事を、はっきり言われ、大きな感動を与えました。

尚、韓国でもMRA推進議員連盟を発足させ日本のMRA推進議員連盟との交流を図ることが合意されました。

又、羽田孜議員は、コーの会議の前にパキスタンに立ち寄られ、同国の首脳とインドとパキスタン間の紛争の解決のために、率直に話し合われたことを全体会議で報告され、大変感動を与えられました。

続いて、橋本徹会長が、責任者であった銀行で1991年に起きた不祥事後、行内での倫理観の向上のために全ての支店を回ってコミュニケーションを図るなどの努力をされた体験等のスピーチも大きな感動を与えるなど、日本人の活躍と貢献が目立った会議となりました。



●一堂に会した日本人参加者

尚、20余ヶ国から、政治家、外交官、政府関係者が集ったこの政治円卓会議のテーマは次のようなものでした。

- ・グローバル化か最小化か? 政府と政治家は、いかに市民社会との信頼を築くことができるか?
- ・国境を超えたよきガバナンス。他人や他国への影響の与え方の良し悪しを、お互いの体験から学ぶ。
- ・小型武器貿易の制限。我々政治家はいかなる対応ができるか?

尚、8月15日から17日に亘る3日間の討議を終えるに当たって、次のような宣言が出されました。

【良きガバナンスと地球村に関して】

良きガバナンスについて、市民社会、市場経済、国際関係等を含む広範な討議の結果、参加者は下記の通り結論した。

- 1) 民主主義、参画するプロセス、そして説明責任無くして良きガバナンスはあり得ない。
- 2) 真の民主主義は、地方、地域、そして国家レベルで、社会の末端の人々をも含め、すべての市民が、人間としての、経済的な、そして社会面での権利を増進かつ確保されるというところにある。
- 3) 良きガバナンスは、民主的機構と権威を通じて、又、司法の独立によって保証される法の支配による、人々の究極の力をベースとする。
- 4) 良きガバナンスのためには、市民社会が政治体制や市民社会の構成要素 --- 組織、個人 --- に係わっていることが必要であり、それらは目標とメソッドにおいて透明性を必要とする。
- 5) 良きガバナンスのため、また、透明性確保のためには、情報メディアの独立性が不可欠である。そして、市民社会は、情報メディアが完全に機能し得ることを保証することに於いて、重要な役割を担っている。
- 6) 良きガバナンスとは、「地球村」において他の人々の幸福に配慮し、「隣人関係」を考えていくことを含む。
- 7) グローバル化する経済への挑戦は、国際的システムでの適切な対応を必要とする。

8) 国際的な平和と安全の為、幾つかの特化されたチャレンジが討議され、参加者は、小型武器の流通に対する徹底的な規制が早急に必要なることを取り上げた。

最後に、この会議の開会式で参加者に一つのチャレンジを投げかけた、ケニアの女性（アメリカの大学を卒業後、ケニアのNGOで女性の社会的自立のために活動中）のスピーチを紹介して報告の結びとしたいと思います。

『私達の住んでいる所は、ブルンジ、ジブチ、エリトリア、エチオピア、ケニヤ、ルワンダ、ソマリア、スーダン、タンザニア、ウガンダの10ヶ国から成る、アフリカの大きな角と呼ばれている地域です。人口は、併せて2億2百万人、10ヶ国合計の国家収入は460億米ドル。この総国家収入額は人口1千百万人のオランダとまさに同規模です。

キリマンジャロ山周辺の肥沃なチャガの土地だけで、地域の全住民の必要を充たすのに十分な食料が生産出来ると言われているにも拘わらず、絶え間ない飢饉に悩む地域に、私は住んでいます。

私は森林伐採と取水施設破壊による砂漠化が、驚くべき比率に達した地域に住んでいます。

私は武装した住民がおり、国境紛争が50年以上も続いている地域に住んでいます。少年兵、強制退去者と避難民達は、利益があがるため活発に行われている小型武器の売買によって一部の生計を支えられています。

私はルワンダの虐殺追悼所で犠牲者の頭蓋骨がきちんと並べられていたのを覚えています。また、南スーダンで、石油と利益追求のために強制退去させられたり、殺された人々に思いを馳せます。ケニアでのいわゆる種族間の衝突も覚えています。

私は貧困と無知が、政府によって、人々を抑圧する道具として使われている地域に住んでいます。

私は感染症/エイズで、毎日数千人が死んで行く地域に住んでいます --- エイズによる孤児、見捨てられた嬰兒、そして、感染症の広がる地域で言葉にならない悲惨さに悩んでいる人々が存在しています。

私は政府が、形式的民主主義、実の所は機能的な独裁主義を行っている地域に住んでいます。

私は政府が人権に何の配慮もせず、為政者としての責任も、財政運営もしない地域に住んでいます。そこでは、個人の利益と権力の維持がゲームのように行われています。

そこでは市民の命は、選挙期間中のみ、担保されるだけで、それ以外の時は、殆ど省みられることはありません。そこでは、貴方や貴方が愛する人が、もし「政治的に何かを表明」すれば、「簡単に消されてしまう」のです。

私は、「誕生しつつあるマーケット」として知られている地域に住んでいます。しかし、一体それは誰の為にあるのか、と問いたいです。

私は、世界貿易額の0.05パーセント以下の取引量を占めるに過ぎない地域に住んでいます。

私は、世界的な自由化されつつある、経済的新世界秩序の、舞い上がるほこりの中で、窒息しつつある地域に住んでいます。--- 参加することもままならず、どんな方法でも競争には勝てません。「負債」について私は述べたでしょうか？

その様はまさに、残酷と言うほかありません。

その構図の中に私はいるのでしょうか？ 一体何か出来るのでしょうか？ 希望はないのでしょうか？

どんな社会の機構の中であろうと、高潔に生きようとする限り、市民社会のメンバーたり得ます。私はこの地域の大変動によるインパクトを見、そしてその中で生きて来ました。私は、自分の地域のために、特に、市民社会運動の枠の中で、女性のために働こうと決心しました。何故なら、女性は、今まであったどんな小さな変動の持つインパクトの重さをも経験してきているからです。もともと女性が主として人を世話して来ましたし、将来の世代や、彼女らの家族のために、より良い明日をもたらすために働く快活さと力とを持っています。女性は地域的にも国家的にも活動の実行者、推進者です。女性は、一步一步、地域のより良い経済、政治、社会環境を作ってゆくものだというビジョンをもっています。



●ケニアの女性と共に、真ん中は相馬名誉会長、右側は榊副会長

私は、私達の地域では、国家に係わる問題で、ヒステリックな、或いは情緒的なトラブルは起こらないと信じています。問題解決のためには、冷静で、現実的で、戦略的なアプローチがなされるものと信じています。勿論、情熱を失ってははいけません。私は、自分の内面、そして外の世界の両方で「チェンジ」を起こすために必要な情熱を持っています。我々の家は我々自身で綺麗にしなければなりません。私はもう、女性教育センターで地域開発のプログラム・コーディネーターとして働くという“私の筈”を見付けました。貴方はどうでしょうか？

今週、私達は市民社会、国と市場の要素を検討し、それに必要な連携を始めます。我々は「地球村」でお互いに結びついています。「地球村」は既に現実のものであり、我々全てが繁栄出来るような村にすることが出来るし、また、そうすべきです。私が自分自身にチャレンジしているように、皆様にもチャレンジします。それは、まず、内省し、具体的で、透明性のある、又、直接参加しうる「地球村」に対する責任ある発展に向けて、あなた方各人のユニークなやり方で寄与するための確固たる決意を見出すことです。』

(ジェロテイク・セイ)

(以上)

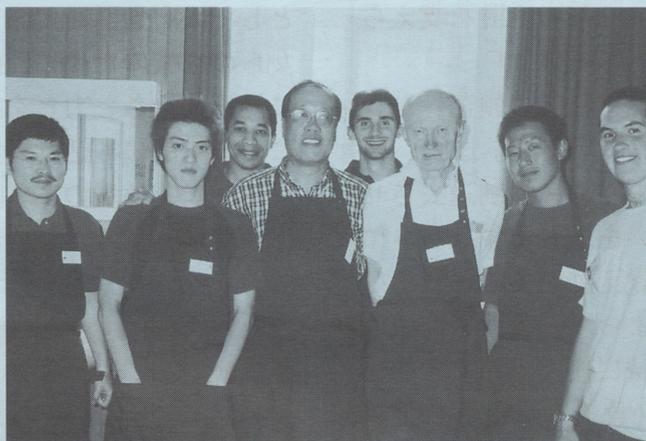
***** 続いて今年参加された大学生のお二人の感想をご紹介します。*****

初めてコーを訪れて

住友 康紀 (学習院大学3年生)

今回、僕は初めてコーに行きました。また、久しぶりの海外でもあり、初めてのヨーロッパでした。コーではMRAの会合が定期的に行われているということは、両親や祖父母の話聞いて知ってはいましたが、まさか自分が行くことになることは夢にも思っていなかった。

今年僕は大学3年生で、ゆっくりできる夏休みは今年が最後だと思い、野球が好きなのでアメリカのシアトルにでも行ってイチローを見ようと計画していました。しかし一緒に行く友人が見つからず、でも海外には行きたいと思っていたところ、両親からコーのことを聞き、行くことにしました。



●サービス・チームと共に (左から2人目が住友君)

コーに行くにあたって心配がありました。一つは、マウンテンハウス現地集合ということでした。最初は不安でしたが、スイスに到着してからは海外の魔力にかかったのか楽しくなってきた、飛行機を乗り継ぎ、電車を乗り換え、無事にたどり着くことが出来ました。もう一つは、言葉です。実は、僕は1歳から7歳までアメリカに住んでいたのですが、日本に帰ってきてからは英語をキレイさっぱり忘れてしまいました。

出発の前に「4ヶ国語会話」(英語・フランス語・イタリア語・ドイツ語)という本を買い、行きの飛行機の中で読んでいきました。この本がのちのち非常に役に立ちました。2週間コーにいましたが、ずっと英語を聞いていると耳が慣れてくるもので、最後の方は日常会話程度だったら苦労しないほどになりました。

コーでの生活は、朝食のあとに全体会議がありました。毎日色々な国の人の話を聞くことが出来ました。新聞では小さな記事でしたが載っていないような国の情勢や、学校では到底知ることの出来ないこと、日本が戦時中に本当にひどい侵略をしたことを、被害をうけた国の人達から話を聞きました。そこで話に出てきた

ことで素晴らしいと思ったことは「歴史を変えることは出来ないが、許すことは出来る」ということでした。相手のことを憎しみ続けることは簡単ですが、許すということは非常に難しいことです。しかし、コーには「許す」という行為ができる人々が集まっていました。もうひとつ、「客観的に自分の事を見る」ことが大事だということが分かりました。人間は自己中心的に物事を考えてしまいがちです。

しかし、一歩ひいて自分を見ることが出来たら自分はもちろん、他人を見る目も変わると思いました。人を見た目で判断してはいけない、ということにもつながると思います。

全体会議の後は、20～30人程度のコミュニティーグループに分かれ、意見をシェアしました。僕は英語があまり出来ないこともあり聞いているばかりでしたが、興味深い話を聞くことが出来ました。旧ユーゴスラビアの話クロアチア人から聞き、彼はお互いに平和に話し合って融和したいと言っていました。また、ルワンダの国内や近隣諸国の問題もその国の人から聞くことが出来ました。その人は女性で、彼女は、大量虐殺が3ヶ月間続けられたと話していました。それが、始まった日と終わった日の年月日を覚えていて、何故その様なことが起きたのか、こと細かく教えてくれました。

これらは、日本にいたのでは詳しく知ることの出来ない話だと思います。このコミュニティーグループの単位で食事作り、食卓の用意、食事のサービスなどをしました。

今回、食事、サービス、スポーツを共にすることで世界各国の幅広い年代の方々と話をする事ができ、仲良くなる事ができました。一番初めに仲良くなったのは、フランスの子供達でした。最初、あちらは僕達の事を警戒していてどうなることかと考えました。しかしここで役立ったものが、日本で買った「4ヶ国語会話」の本でした。フランス語の挨拶を覚えていき、おぼつかない感じで話すとすごく喜んでくれて、それから完全に打ち解けました。母国語で挨拶程度でも話しかけられると嬉しいもので、たまにマウンテンハウス内ですれ違いざまに日本語で挨拶されると何かホッとするものがありました。(以上)

△△△ コー・スカルーズ・プログラムに参加して ▽▽▽

目黒 裕佳子(青山学院大学在学中)

私はこの夏、真っ青なレマン湖が見渡せるコーにおける、世界中から学生を集め、紛争の解決・平和構築 (Conflict transformation/ Peace Building) の理念と技術を学ぶというコー・スカルーズ・プログラム (Caux Scholars Program) に参加しました。今年の参加者はガーナ、ナイジェリア、旧ユーゴスラビア、インド、パキスタン、トリニダードトバゴ、パレスチナ、メキシコ、ブルガリア、ルーマニア、ウクライナ、ノルウェー、アメリカ、そして、日本からの21人でした。私達が対象とした「コンフリクト(紛争)」は、暴力を伴う国家間・民族間紛争から、政治的内戦、独立紛争、人種差別、宗教やその他思想に由来する紛争、そして小規模なグループやパーソナルな対立関係にも及ぶものであり、紛争状態を回避・解消するためのアイデアや技術に関して、実践的で質の高い授業が行われました。



●コー・スカルーズ・プログラムのメンバーと(左端が目黒さん)

にグループに分かれて紛争を分析、そして自由な形で一つに纏め上げるというタスクを課され、約2週間グループワークを行いました。参加者の中にはさまざまに紛争を体験した者もあり、そのトラウマ、敵意、憎しみの感情は、紛争を「分析」したからと言ってそう簡単に癒されるものではありません。皆が持ち込んだ紛争は、それぞれがショッキングなものであり、ニュースで見えていた「遠くの出来事」は、彼らと知り合うことによりグッと引き寄せられ、私にとっても現実の問題となりました。さて、私はインド、パキスタン、パレスチナからの参加者と一緒にプレゼンテー

ションをすることとなりましたが(論点は当然、カシミール問題、イスラエル-パレスチナ紛争)、これは苛酷なプロセスでした。

最初のミーティングの険悪なムードといったら思い出すだけでぞっとします。それでも強引にも毎日のように集まって長

私達はそれぞれ身近なコンフリクトについてプレゼンテーションを行い、後時間を一緒に時間を過ごすうち、次第に互いを理解

し始め、論点は収斂し、結局4人のプレゼンテーションは中身の濃い息の合ったものになりました。

この経験を通して私が学んだ教訓は、「五感を全開にして聴く(Active Listening)」ということでした。英語圏に住んだ経験のない私には言葉の問題もあり、この強烈なメンバーの中で、話を聴くことぐらいしかなかったというのが実際のところでした。

しかし、真剣に聴くということが答えを出してあげることよりもよっぽど必要とされているというのは私の実感でした。そして聴く姿勢を持ち続けたことにより、主張の強い三人も私の意見に耳を傾けてくれたのでした。相手を理解し、有効なコミュニケーションを図るためには、当事者の文化的・宗教的背景、現実的状况について知ることが非常に重要であるということも考えさせられたポイントでした。後になって思えば、このようなグループ作業の意図は、紛争の本質を理解するという点と同時に、極めて異なった経験やバックグラウンドをもつメンバーの、異なった認識をどのように収斂させるか、いわば紛争解決プロセスの実践という点にもあったのかもしれませんが。

コーという場所は、多様な要素が無秩序に共存する、サラダボールのようなスペースでした。強力な議長がいるわけでも法律があるわけでもなく、ともかくごちゃごちゃに混ざりながらも一緒にいることにより融和の雰囲気をつくり出すのです。どんな人とコンタクトを取ることも自由で、三度の食事とティータイムには毎日新しい出会いが待っていました。さらに、マウンテンハウスのルール(滞在する人全員が少しずつ手伝いをする)により普段なかなかお目にかかれなような人々と時間を共有することもできました。ハイコンテクストで、人間的なこの空間には、将来における創造的でユニークなアイデアが隠されているように思われ、そして不思議なことに、私は「アジア的な混沌と調和・価値観」についてしきりに考えるようになりました。

また、海外に出ると自国が見えてくるという話は本当で、私は日本人として生きていく自分を、異国の地で再発見したような気さえしていました。

最後の夜、私達はキャンプファイヤーを囲みそれぞれの参加者に感謝の言葉を述べ合いました。私は我が道を行くマイペースタイプで、話をするより聴いているような人間です。比較的自己主張の強い彼らが私の芯の逞しさを認め、「日本人が皆あなたのようななら日本は素晴らしい国になる」などと言ってくれたのは本当に意外で嬉しいことでした。火が消えてしまうと、遠く下方に見える町の灯りと、夜空の星と、私達の持つ蠟燭の光りは混ざり合って、私の頭をボウッと感動に浸らせました。

その晩、悲しいニュースが飛び込んできました。前日の爆弾事件のためか、イスラエルの国境が封鎖され、メンバーのひとりの帰国の途が途絶えてしまったのです。家族を気遣う思いと、いつ家に帰れるか分からないという不安のため、彼は大きな身体を震わせ大粒の涙を流しました。悲しかったです。素晴らしい一月を共に過ごした友人は、現実には想像を絶する困難に直面していたのです。

一ヶ月を通し、この才能あふれる雑多集団は物凄い団結力を発揮しました。参加者は互いの尊重というあたりまえの前提のもと、腹藏なく、民族・宗教・人種・ジェンダー(性差)等というセンシティブな問題にも率直に向き合い、タブーがないかのようにダイレクトにコミュニケーションを交わしました。そして今彼らは私にとって掛替えのない友人となりました。多くの出会いを通して心の地図は広がり、私は自分を相対化することを知り、それまで持っていた無意味な独断や偏見は何処かに飛んでいったかのようなようでした。密度の濃い時間は私に多くの問いを投げかけ、同時に個人の可能性と無力さについて教えてくれました。私には何ができるのだろうか、これが今、大きなクエスチョンとなったのです。(以上)



●朝鮮半島問題についてのワーク・ショップで話す韓国のユ一議員



●スピーチをする羽田孜元首相

第24回関西MRA秋季大会報告

「グローバル化する世界と私たちの責任

—21世紀のための目的と価値観を探る—

晴天に恵まれた去る10月6日から7日にかけて、「グローバル化する世界と私たちの責任—21世紀のための目的と価値観を探る—」のテーマで第24回関西MRA秋季大会が、大阪市のロッジ舞洲で開催されました。

東京からの参加者も含め、ビジネスマン、教育者、NGO関係者、主婦など様々な背景を持った30名ほどの参加者は、年齢も大学生から熟年者に至る幅広いものであり、充実した2日間を共に過ごしました。

23年間にわたりネパールでの教育援助に携わってきた参加者は、「MRAの4つの道義標準（正直、純潔、無私、愛）を自分の行動の物差しとして使うことによりNGOの活動を今日まで続けてくることができ感謝しています。現在世界の70ヶ所以上で戦争が行われており、その犠牲者の9割以上は民間人です。これから兵器輸出禁止のための活動をやっていきたいと思っています。」とそのアイデアを語ってくれました。

又、阪神や台湾での震災時にボランティアとして活躍した立命館大学の学生は、今年3月にカンボジアを訪ね、地雷原で恐怖感と無力感を味わったのをきっかけに、地雷撤去を助けるための新しいNGOをスタートさせることにした。又、地雷で足を失いながら、『変えられないものは何もない。何でも出来る。自分の出来ることをやれば良い。』と義足で走る、クリス・ムーン氏の言葉と信念に勇気づけられたと語ってくれました。「1年に10万個の地雷を撤去しても新たに250万個の地雷が埋設されてしまう、又、毎日世界中で多くの子供達が餓死する一方、日本では莫大な量の残飯が捨てられているという現実があります。人への信頼や愛をもっているはずの人間が、次の瞬間には人を物扱いするようなことができるという事実も確かにあります。自分の心の中にもそのような地雷があるということを自覚しながら、絶望的な状況を変えるのも、又、人であると、

あきらめずにやっていきたいと思います。『今日が地球の最後の日であっても、私はリンゴの樹を植える』という言葉が好きです。」との彼の言葉に一同大いに共感しました。

又、歯科医である参加者は、シックハウス問題に気付きその問題を解決したいと考え活動を始めていた1995年に、この秋季大会に参加し、その時、「誰が間違っていると非難するだけでは解決につながらない、誰が正しいかでなく何が正しいかで考えるようにと教わったことにより、今年の11月には関係各省市庁や住宅会社等々の参加を得て、シンポジウムを開催するところまで漕ぎ着けられました。これは、この関西MRA秋季大会に参加させてもらったお陰です。」と話しました。

今年のスイス・コーでの会議に出席した参加者は、「コーでは、自分が良く知らなかったモルドバ（旧ソ連から独立）といった国の青年やロシアの若者、そして、率直に話をした香港の青年等と親しくなれました。コーには基本的な信頼のベースが存在します。地球がつぶれそうな時にお互いがいがみあっている場合ではないと感じます。」と色々な具体的な体験を交えて報告してくれました。

初めての参加者の一人は、「ここでは、何でも安心して話せます。皆さんがここで話されたこと全てを若いお母さん方の子育ての基本にしてもらったら良いし、自分も実践してこの精神を伝えて生きたいと思います。MRAとは、ここでエサをもらって、あちこちに種を落とす小鳥のようなものだと感じます。」と話しました。

MRAの相馬名誉会長は、「MRAは、世界とのつながりを与えてくれます。日本だけではできないのです。若い人たち、これから生まれてくる人たちのためにも、世界に対する役割をここにいる一人ひとりが本気になって果たして欲しいのです。」と激励しました。（以上）

▼▼ CRT 部会ニュース ▲▲

第 16 回経済人コー円卓会議

CRT グローバル・ダイアローグ（ロンドン会議）報告

企業行動（CRT）部会事務局コーディネーター 須田康司

去る9月9日（日）～11日（火）にロンドンで開催された今年度のCRTグローバル・ダイアローグについて要旨をご報告致します。今回は、ロンドン・ケンジントンのロイヤル・ガーデン・ホテルで開催されました。米国18名、英国8名、カナダ3名、スイス、スロバキア、デンマーク、ベルギー、ドイツ、オランダ、ペルー、メキシコ、シンガポールからの各1名に加え、日本からは、小笠原敏晶ニフコ会長、レスリー・ロード、ニフコ秘書室部長、金子保久国際科学技術財団事務局長、鶴岡一キヤノン常務取締役の4名を合わせた正規参加者42名に加え、駿河台大学の水尾順一教授を初め5名のオブザーバー、そして事務局10名の計57名が参加しました。又、スピーカーとして英国政府・海外開発担当大臣のクレア・ショート女史が一部参加されました。

1. プログラムの概要

今回のプログラムは9月9日夜のオープニング・ディナーで幕を開けました。冒頭にはCRTの主要なメンバーとして共生の理念をCRTに紹介された故賀来龍三郎キヤノン名誉会長を偲ぶためのビデオが流されましたが、その大きなビジョンと哲学は改めて参加者に大きな感動を与えました。10日夜には英国議会チャーチル・ルームでハウ卿ご夫妻主催のカクテル・パーティーが開催され、エリザベス女王のいところにあたるプリンス・マイケル・オブ・ケント他各国の駐英大使などの方々が参加されました。グローバル・ダイアローグは10日と11日の両日で行われ、途中でニューヨークでの衝撃的なテロ事件の報が飛び込み、全員で黙祷を捧げるなど一時重苦しい空気となりましたが、「共生の理念がいかに重要であるか」という発言が改めて多くの参加者から述べられました。会議は11日夜のクロージング・ディナーで無事終了しました。

2. グローバル・ダイアローグ

下記のそれぞれのセッション毎の議題に従い活発な討議が行われました。

【第1セッション及び第2セッション】

- ・ 議題：「CRTのビジョン：節義あるビジネスリーダーシップと貧困問題解決への挑戦」

CRTのウォーリン会長から、「環境問題やチャイルド・レーバーの問題等の現在我々が地球規模で抱えている問題は貧困問題と密接に関係しており、貧困問題の解決なしにこれらの問題の解決はありえない。更に、貧困問題の解決は持てる国の資金を有するセクター、即ちビジネスセクターによる“投資”が必要である。勿論ビジネスセクター単独でなし得るものではなく、相手国の政府や国連やWTOといった国際機関と連携して行う必要がある。CRTに参加しているメンバーはこれに挑戦する資格を備えた企業であり、是非、行動を起こしたい。具体的には、CRTとして6～7名のミッションを組織し、対象国（テイクオフしていないが、その為の条件を備えている国）を1～2カ国選び出し、ミッションを受け入れる合意が取れるならば、対象国を訪問し投資を受ける為の条件整備他について話をして行くことにしたい。」との行動案が提起されました。

メンバーから色々意見が出されましたが、小笠原CRT部会長、金子CRT部会幹事から、例えば日本企業にも既にこれらの国に投資している企業があり、事前調査等周到な準備を重ねたノウハウの蓄積があるはずなので、これらも利用して十分な調査をし計画を作成した上で実行の可否を判断すべきであるとの提案がなされ、CRT事務局で本年中に案を作成することになりました。

【第3セッション】

- ・ 議題：「価値を生む投資の促進：投資に関係した不正の発生防止」

セッションの議長から「対外直接投資の活発化に伴って不正な形で被投資国から流出する金額も増え続けている。この不正流出の3大原因は犯罪に関係したものの、贈収賄に関係したものと並びに不正取引に関係したものである。」という趣旨の報告がありました。スロバキアの参加者から、東欧の状況についての報告がありましたが、まだまだ根深い「構造的な汚職」が存在するとのことでした。

【第4セッション】

- ・ 議題「節義あるビジネスの実践：ロイヤル・ダッチ・シェルの例」

ロイヤル・ダッチ・シェル・グループ副会長兼ロイヤル・ダッチ石油社長のジェロエン・ヴァン・デル・ビア氏から、同社の行動指針の実施状況について、以下の様な趣旨の報告がありました。

「シェルでは『節義あるビジネスは利益を生む』との基本的な考え方にに基づき、9項目の企業行動指針を定めてコンパクトに製本し、各従業員が常に携行することになっている。また、この指針は同社で実践するのみならず、取引相手やビジネス・パートナーにも実践を強く要請している。これを受け入れてくれない会社とは取引をしないし、ジョイントベンチャーからも手を引くこととしている。実際に、これまでに106件の契約を中止し、2件のジョイントベンチャーから引き上げた実績がある。多くのケースが取引相手やパートナーが、指針の第6条（健康、環境への配慮）を守らないものであった。」

【第5セッション】

- ・ 議題：「良き企業統治の構築について」

企業がどのように行動するかということの方が、企業がどのように効率よく組織されているかということより重要であり、取締役会が果たすべき役割は大きいのです。また、取締役会自体やCEOの評価を正当に行う為には、その企業のマネジメントではないインディペンデント・ダイレクターが取締役会のリーダーシップをとれるような制度とすることが重要です。取締役会の独立性を保つことが極めて大切であり、また、取締役がその企業が属する業界の知識を常にアップデートする等の自己研鑽を怠らないこともまた必要です。

【第6セッション】

- ・ 議題：「激化するNGOの反グローバル化活動について」

企業はグローバル化に反対するNGOからのチャレンジに真摯に対応せねばなりません。例えば、コーヒ・ショップのチェーン店を展開するスターバックス社では、発展途上国の弱小農家からは市場価格以上の価格で購入する輸入業者から買い付けを行い、全米の2000以上の店で販売しています。また、マクドナルドは年間20億個の鶏卵を買い付けていますが、業者に対して鶏の扱いについてのガイドラインを発して、これに従わない業者は契約を破棄する旨伝える処置を取っています。これらは企業側の努力のほんの一例ですが、NGOとの対話を通して正確かつ十分な情報を提供するように努力することが必要です。

【第7セッション】

- ・ 議題：「ビジネス・リーダー個々人が出来ることについて」

各企業が行動を自ら律することが肝要です。CRTではその為のツールとして「自己評価及び向上プロセス」(Self-Assessment and Improvement Process [SAIP])を作成し、今後2年間に亘って複数の企業によるテストを経た上で、各企業に実施を薦めて行く考えです。このSAIPはマルコム・ボールドリッジ賞のプロセスを参考にして、コー円卓会議・企業の行動指針を基に作成された、270項目強にわたる企業が自らの行動をテストするツールです。

(以上)

▼▼MRAニュース短信▲▲

◇マーキン大使が帰国◇

ボスニア・ヘルツェゴビナ初代駐日大使として1998年12月に来日され、日本でのMRAの活動に積極的に参加されたベンジャミン・マーキン大使が、任期を終え、去る9月2日に帰国されましたが、次のようなメッセージを日本のMRAの方々に寄せられました。

親愛なる国際MRA日本協会の皆様へ

日本在任中、皆様にお会い出来た事を本当に嬉しく存じております。私が最も助けを必要としていた時に、皆様にご支援を頂けたことは、私にとって、本当に筆舌に尽くし難いほど有難いものでした。そして、私が任務を了へて帰国しようとしている現在も、皆様にご支援を頂いていることに対しましても、心から厚く御礼を申し上げます。

それは、決して計算ずくの世界の豊かさからではなく、親として、そして社会人としての義務を果たすにとどまらない働きをされている皆様の心からの善意から生じたものに他ならないと思います。

この記念品は私からの感謝の印です。助けを必要としている人たちの為に、この世界を幸せな場所にしようと皆様が努力されていることに、私の国も、私も心より感謝していることを、この品を見て思い起こして頂ければと思います。

私が在任中、皆様から賜ったご支援とご理解に厚く御礼を申し上げますと共に、私の家族の不幸（事務局註：今年、奥様を亡くされました）に際し賜りました御弔意にも、心より感謝申し上げます。

若い世代の皆様のことも考えています。皆さんが、現代社会が抱える多くの問題や紛争に対し、その解決のために積極的に取り組もうとされているのを知り、今後の世界に私が大いなる確信を抱くに至ったということを強調したいと思います。 2001年9月26日



●記念品を橋本会長に手渡すマーキン大使

◇MRAの新名称◇

本年のコー世界大会中の8月6日～7日に開催された国際連絡調整会議でMRAの新しいオペレーション・ネーム（日常活動で使用する名前）をイニシアティブス・オブ・チェンジ（Initiatives of Change)とすることが決まりました。今後、世界の新しい共通の名前として使われて行くこととなりますが、当分の間は、MRAの名前と併用していくことが可能です。日本での適切な訳語を求め来年の3月の総会に諮りたいと予定しております。（定款等、法律の摘要面では、MRAの名称を継続して用いる予定です。）

◇軽井沢でユース・ギャザリングを開催◇

去る8月31日から9月2日にかけて軽井沢でユース・フォーラムの主催、MRA協会の後援、そして、MRA女性の会有志の協力の下、ユース・ギャザリングが開催されました。韓国、台湾、ドイツ、イギリス、ルーマニアの青年を含む10数名の青年に加え、マーキン大使等のゲストを併せ20余名が参加し、「紛争解決の手法」について学んだり、ゲスト諸氏より、カメラ撮影の技術、編み物、ゴルフ等を教わる時間など盛り沢山のプログラムがありました。

事務局便り

◆9月11日のアメリカでの同時多発テロで亡くなられた方々に対し心から哀悼の意を表します。ついに、アフガニスタンへの爆撃も始まり、映像で伝えられる多くの難民の人々の姿に心が痛む日々です。去る9月26日のMRA例会でも「今、私たちに出来ること」を考えようと急遽話し合いの時間を設けました。地球村のメンバーとして、グローバル化する世界とその中に存する貧富の格差と物質主義の弊害という大きな問題の解決のために、そして、破壊の技術に大きく遅れをとった和解をもたらす術を磨くためにはどうしたら良いかを皆様と共に真剣に学んで参りたいと思っております。